

赤いくし

DE RODE SKO

ハンス・クリステイアン・アンデルセン

Hans

楠山正雄訳



赤いくつ DE RODE SKO



あるところに、ちいさい女の子がいました。その子はとてもきれいなかわいらしい子でしたけれども、貧乏だったので、夏のうちははだしであるかなければならず、冬はあつぽつたい木のくつをはきました。ですから、その女の子のかわいらしい足の甲こゝは、すっかり赤くなつて、いかにもいじらしく見えました。

村のなかほどに、年よりのくつ屋のおかみさんが住んでいました。そのおかみさんはせつせと赤いらしゃの古切れをぬつて、ちいさなくつを、一足こしらえてくれました。このくつはずいぶんかっこうのわるいものでしたが、心のこもった品で、その女の子にやることになりました。その女の子の名はカレンといいました。

カレンは、おつかさんのお葬式そうしきの日に、そのくつをもらつて、はじめてそれをはいてみました。赤いくつは、たしかにおとむ

らいにはふさわしくないものでしたが、ほかに、くつといつてなかつたので、素足すあしの上うへにそれをはいて、粗末くそまつな棺かんおけのうしろからついていきました。

そのとき、年とつたかつぷくのいいお年よりの奥さまおくをのせた、古風な大馬車だいばしやが、そこを通りかかりました。この奥さまは、むすめの様子ようすをみると、かわいそうになつて、

「よくめんどろをみてやりとうございます。どうか、この子を下さいませんか。」と、坊さんぼふさんにこういつてみました。

こんなことになつたのも、赤いくつのおかげだと、カレンはおもいました。ところが、その奥さまは、これはひどいくつだといつて、焼きすてさせてしまいました。そのかわりカレンは、小ぎつぱりと、見ぐるしくない着物を着せられて、本を読んだり、物を縫ぬつたりすることを教えられました。人びとは、カレ

ンのことを、かわいらしい女の子だといいました。カレンの鏡は、

「あなたはかわいらしいどころではありません。ほんとうにお美しくつていらつしやいます。」と、いいました。

あるとき女王さまが、王女さまをつれてこの国をご旅行になりました。人びとは、お城のほうへむれを作つてあつまりました。そのなかに、カレンもまじっていました。王女さまは美しい白い着物を着て、窓のところにあらわれて、みんなにご自分の姿が見えるようになさいました。王女さまはまだわかいので、もすそ裳裾もひかず、金の冠かんむりもかぶっていませんでしたが、目のさめるような赤いモロッコ革のくつをはいていました。そのくつはたしかにくつ屋のお上さんが、カレンにこしらえてくれたものより、はるかにきれいなきれいなものでした。世界じゅうさが

したつて、この赤いくつにくらべられるものがありましたでしょうか。さて、カレンは堅信礼けんしんれいをうける年頃になりました。新しい着物ができたので、ついでに新しいくつまでこしらえてもらつて、はくことになりました。町のお金持のくつ屋が、じぶんの家のしごとべやで、カレンのかわいらしい足の寸法をとりました。そこには、美しくくつだの、ぴかぴか光る長ぐつだのがはいつた、大きなガラス張りの箱はこが並んでいました。そのへやはたいへんきれいでしたが、あのお年よりの奥さまは、よく目が見えなかつたので、それをいつこういいともおもいませんでした。いろいろとくつが並んでいるなかに、あの王女さまがはいていたのとそっくりの赤いくつがありました。なんとという美しいくつでしたらう。くつ屋さんは、これはある伯爵はくしやくのお子さんのためにこしらえたのですが、足に合わなかつたのですといいまし

た。

「これはきつと、エナメル革がわだね。まあ、よく光ってること。」と、お年よりはいいました。

「ええ。ほんとうに、よく光っておりますこと。」と、カレンはこたえました。そのくつはカレンの足に合ったので、買うことになりました。けれどもお年よりは、そのくつが赤かつたとは知りませんでした。というのは、もし赤いということがわかつたなら、カレンがそのくつをはいて、堅信礼けんしんれいを受けに行くことを許さなかつたはずでした。でも、カレンは、その赤いくつをはいて、堅信礼をうけにいきました。

たれもかれもが、カレンの足もとに目をつけました。そして、カレンがお寺のしきいをまたいで、唱歌所の入口へ進んでいったとき、墓石の上の古い像ぞうが、かたそうなカラーをつけて、長

い黒い着物を着たむかしの坊さんや、坊さんの奥さんたちの像までも、じつと目をすえて、カレンの赤いくつを見つめているような気がしました。それからカレンは、坊さんがカレンのあたまの上に手をのせて、神聖な洗礼のことや、神さまとひとつになること、これからは一人前のキリスト信者として身をたもたなければならぬことなどを、話してきかせても、自分のくつのことばかり考えていました。やがて、オルガンがおごそかに鳴って、こどもたちは、わかいうつくしい声で、さんび歌をうたいました。唱歌組をさしずする年とつた人も、いつしよにうたいました。けれどもカレンは、やはりじぶんの赤いくつのことばかり考えていました。

おひるすぎになつて、お年よりの奥さまは、カレンのはいていたくつが赤かった話を、ほうぼうでききました。そこで、そ

んなことをするのはいやなことで、れいぎにそむいたことだ。これからお寺へいくときは、古くとも、かならず黒いくつをはいていかなくってはならない、と申しわたしました。

その次の日曜は、堅信礼のあと、はじめての聖餐式せいさんしきのある日でした。カレンははじめ黒いくつを見て、それから赤いくつを見ました。——さて、もういちど赤いくつを見なおした上、とうとうそれをはいてしまいました。その日はうららかに晴れていました。カレンとお年よりの奥さまとは、麦畑のなかの小道を通つていきました。そこはかなりほこりつぽい道でした。

お寺の戸口のところまつばづえに、めずらしいながいひげをはやした年よりの兵隊が、松葉杖まつばづえにすがつて立っていました。そのひげは白いというより赤いほうで、この老兵はほとんど、あたまが地面につかないばかりにおじぎをして、お年よりの奥さまに、ど

うぞくつのほこりを払わせて下さいとたのみました。そしてカレンも、やはりおなじに、じぶんのちいさい足をさし出しました。

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。踊るとき、ぴつたりと足についていますように。」と、老兵はいつて、カレンのくつの底を、手でぴたぴたたたきました。

奥さまは、老兵にお金を恵んで、カレンをつれて、お寺のなかへはいつてしまいました。

お寺のなかでは、たれもかれもいつせいにも、カレンの赤いくつに目をつけました。そこにならんだのこらずの像も、みんなその赤いくつを見ました。カレンは聖壇せいだんの前にひざまずいて、金のさかずきをくちびるにもつていくときも、ただもう自分の赤いくつのことばかり考えていました。赤いくつがさかずきの

上にうかんでいるような気がしました。それで、さんび歌をうたうことも忘れていけば、主のお祈しゅをとなえることも忘れていました。

やがて人びとは、お寺から出てきました。そしてお年よりの奥さまは、自分の馬車にのりました。カレンも、つづいて足をもちあげました。すると老兵はまた、

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。」と、いいました。

すると、ふしぎなことに、いくらそうしまいとしても、カレンはふた足三足、踊の足をふみ出さずにはいられませんでした。するとつづいて足がひとりで、どんどん踊りつづけていきました。カレンはまるでくつのしたままになっっているようでした。カレンはお寺の角のところを、ぐるぐる踊りまわりました。い

くらふんばつてみても、そうしないわけにはいかなかったのです。そこで御者がおっかけて行つて、カレンをつかまえなければなりませんでした。そしてカレンをだきかかえて、馬車のなかへいれましたが、足はあいかわらず踊りつづけていたので、カレンはやさしい奥さまの足を、いやというほどけりつけました。やつとのことで、みんなはカレンのくつをぬがせました。それで、カレンの足は、ようやくおとなしくなりました。

内へかえると、そのくつは、戸棚にしまいこまれてしまいました。けれどもカレンはそのくつが見たくてたまりませんでした。

さて、そのうち、お年よりの奥さまは、たいそう重い病気に
かかつて、みんなの話によると、もう二どとおき上がれまいと
いうことでした。たれかがそのそばについて看病して世話して

あげなければなりませんでした。このことは、たれよりもまずカレンがしなければならなかつとめでした。けれどもその日は、その町で大舞踏会ぶとうかいがひらかれることになつていて、カレンはそれによばれていました。カレンは、もう助からないらしい奥さまを見ました。そして赤いくつをながめました。ながめたところで、べつだんわるいことはあるまいとかがえました。——すると、こんどは、赤いくつをはきました。それもまあわるいこともないわけでした。——ところが、それをはくと、カレンは舞踏会ぶとうかいにいきました。そして踊りだしたのです。

ところで、カレンが右の方へ行くこうとすると、くつは左の方へ踊り出しました。段段だんだんをのぼって、げんかんへ上がろうとすると、くつはあべこべに段段だんだんをおりて、下のほうへ踊り出し、それから往来に来て、町の門から外へ出てしまいました。そのあ

いだ、カレンは踊りつづけずにはいられませんでした。そして踊りながら、暗い森のなかへずんずんはいつていきました。

すると、上の木立こたちのあいだに、なにか光ったものが見えたので、カレンはそれをお月さまではないかとおもいました。けれども、それは赤いひげをはやしたれいの老兵で、うなずきながら、

「はて、ずいぶんきれいなダンスぐつですわい。」と、いいました。

そこでカレンはびっくりして、赤いくつをぬぎすてようとおもいました。けれどもくつはしっかりとカレンの足にくっついていました。カレンはくつ下を引きちぎりました。しかし、それでもくつはぴったりと、足にくっついていました。そしてカレンは踊りました。畑の上だろうが、原っぱの中だろうが、雨

が降ろうが、日が照ろうが、よるといわず、ひるといわず、いやでもおうでも、踊って踊って踊りつづけなければなりませんでした。けれども、よるなどは、ずいぶん、こわい思いをしました。

カレンはがらんとした墓地ほちのなかへ、踊りながらはいつていきました。そこでは死んだ人は踊りませんでした。なにかもつとおもしろいことを、死んだ人たちは知っていたのです。カレンは、にがよもぎが生えている、貧乏人のお墓はかに、腰をかけようと思いました。けれどカレンは、おちつくこともできなければ、休むこともできませんでした。そしてカレンは、戸のあいているお寺の入口のほうへと踊りながらいったとき、ひとりの天使がそこに立っているのをみました。その天使は白い長い着物を着て、肩から足までもとどくつばさをはやして、顔付きはま

じめに、いかめしく、手にははばの広いぴかぴか光る剣を持っています。

「いつまでも、お前は踊らなくてはならぬ。」と、天使はいいました。「赤いくつをはいて、踊っておれ。お前が青じろくなくなつて冷たくなるまで、お前のからだがしなびきつて、骸骨がいこつになつてしまふまで踊っておれ。お前はこうまん、いばつたこどもらが住んでいる家を一軒けん、一軒と踊りまわらねばならん。それはこどもらがお前の居ることを知つて、きみわるがるように、お前はその家の戸を叩かなくてはならないのだ。それ、お前は踊らなくてはならんぞ。踊るのだぞ——。」

「かんにんしてください。」と、カレンはさげびました。

けれども、そのまに、くつがどンドン門のところから、往來や小道を通つて、畑の方へ動き出していつてしまったものです。

から、カレンは、天使がなんと返事をしたか、聞くことができ
ませんでした。そして、あくまで踊って踊っていなければなり
ませんでした。

ある朝、カレンはよく見おぼえている、一軒の家の門かどぐちを
踊りながら通りすぎました。するとうちのなかでさんび歌をう
たうのが聞こえて、花で飾られたひつぎが、中からはこび出さ
れました。それで、カレンは、じぶんをかわいがってくれたお
年よりの奥さまがなくなつたことを知りました。そして、じぶ
んがみんなからすてられて、神さまの天使からはのろいをうけ
ていることを、しみじみおもいました。

カレンはそれでもやはり踊りました。いやおうなしに踊りま
した。まっくらな闇の夜も踊っていなければなりませんでした。
くつはカレンを、いばらも切株の上も、かまわず引っぱりまわ

しましたので、カレンはからだや手足をひつかかれて、血を出してしまいました。カレンはとうとうあれ野を横ぎって、そこにぽつんとひとつ立っている、小さな家のほうへ踊っていきました。その家には首切役人くびぎりやくにんが住んでいることを、カレンは知っていました。そこで、カレンはまどのガラス板を指でたたいて、「出て来て下さい。——出て来て下さい。——踊っていなければならないので、わたしは中へはいることはできないのです。」と、いいました。

すると、首切役人はいいました。

「お前は、たぶんわたしがなんであるか、知らないのだろう。わたしは、おのである人間ひとの首を切りおとす役人だ。そら、わたしのおのは、あんなに鳴っているではないか。」

「わたし、首を切ってしまうてはいやですよ。」と、カレンはい

いました。「そうすると、わたしは罪を悔い改めることができな
くなりますからね。けれども、この赤いくつといっしょに、わ
たしの足を切つてしまつてくださいな。」

そこでカレンは、すっかり罪をざんげしました。すると首斬
役人は、赤いくつをはいたカレンの足を切つてしまいました。
でもくつはちいさな足といっしょに、畑を越えて奥ぶかい森の
なかへ踊つていつてしまいました。

それから、首切役人は、松葉杖といっしょに、一つの木の
つぎ足を、カレンのためにこしらえてやって、罪人ざいにんがいつもう
たうさんび歌を、カレンにおしえました。そこで、カレンは、
おのをつかつた役人の手にせつぷんすると、あれ野を横ぎつて、
そこを出ていきました。

（さあ、わたしは十分、赤いくつのおかげで、苦しみを受けてし

まったわ。これからみなさんに見てもらおうように、お寺へいつてみましよう。)

こうカレンはこころにおもつて、お寺の入口のほうへいそぎましたが、そこにいきついたとき、赤いくつが目の前でおどつていました。カレンは、びつくりして引返してしまいました。

まる一週間というもの、カレンは悲しくて、悲しくて、いじらしい涙を流して、なんどもなんども泣きつづけました。けれども日曜日になったとき、

(こんどこそわたしは、ずいぶん苦しみましたし、たたかいてもしてきました。もうわたしもお寺にすわつて、あたまをたかく上げて、すこしも恥じるところのない人たちと、おなじぐらいただしい人になったとおもうわ。)

こうおもいおもい、カレンは勇気を出していつてみました。け

れども墓地の門にもまだはいらないうちに、カレンはじぶんの目の前を踊っていく赤いくつを見たので、つくづくこわくなつて、心のそこからしみじみ悔いをかんじました。

そこでカレンは、坊さんのうちにいって、どうぞ女中に使つて下さいとたのみました。そして、なまけずにいっしょうけんめい、はたらけるだけはたらきますといいました。お給金きゅうごんなどはいただこうとおもいません。ただ、心のただしい人びととひとつ屋根の下でくらすせていただきたいのです。こういうので、坊さんの奥さまは、カレンをかわいそうにおもつてつかうことにしました。そしてカレンはたいそうよく働いて、考えぶかくもなりました。夕方になつて、坊さんが高い声で聖書をよみますと、カレンはしずかにすわつて、じつと耳をかたむけていました。こどもたちは、みんなとてもカレンが好きでした。けれ

ども、こどもたちが着物や、身のまわりのことや、王さまのよ
うに美しくなりたいなどといいあつているとき、カレンは、た
だ首を横にふつていました。

次の日曜日に、人びとはうちつれてお寺にいきました。そし
て、カレンも、いつしよにいかないかとさそわれました。けれ
どもカレンは、目にいつぱい涙をためて、悲しそうに松葉杖を
じつとみつめていました。そこで、人びとは神さまのお声をき
くために出かけましたが、カレンは、ひとりかなしく自分のせ
まいへやにはいつていきました。そのへやは、カレンのベット
と一脚きやくのいすが、やつとはいるだけの広さしかありませんで
した。そこにカレンは、さんび歌の本を持っていすにすわりま
した。そして信心ぶかい心もちで、それを読んでいきますと、風
につれて、お寺でひくオルガンの音ねが聞こえてきました。カレ

ンは涙でぬれた顔をあげて、

「ああ、神さま、わたくしをお救いくださいまし。」と、いいました。

そのとき、お日さまはいかにもうららかなかがやきわたりました。そしてカレンがあ晩お寺の戸口のところで見た天使とおなじ天使が、白い着物を着て、カレンの目の前に立ちました。けれどもこんどは鋭い剣のかわりに、ばらの花のいっばいさいたみごとな緑の枝を持っていました。天使がそれで天井にさわりますと、天井は高く高く上へのぼって行って、さわられたところは、どこものこらず金の星がきらきらかがやきだしました。天使はつぎにぐるりの壁にさわりました。すると壁はだんだん大きく大きくよこにひろがっていきました。そしてカレンの目に、鳴っているオルガンがみえました。むかしの坊さんたちや

その奥さまたちの古い像ぞうも見えました。信者のひとたちは、飾りたてたいすについて、さんび歌の本を見てうたっていました。お寺ごとそつくり、このせまいへやのなかにいるかわいそうな女の子のところへ動いて来たのでございます。それとも、カレンのへやが、そのままお寺へもつていかれたのでしようか。——カレンは、坊さんのうちの人たちといっしょの席についていました。そしてちようどさんび歌をうたいおわつて顔をあげたとき、この人たちはうなずいて、

「カレン、よくまあ、ここへきましたね。」といいました。

「これも神さまのお恵みでございます。」とカレンはいいました。そこで、オルガンは、鳴りわたり、こどもたちの合唱の聲は、やさしく、かわいらしくひびきました。うららかなお日さまの光が、窓からあたたかく流れこんで、カレンのすわっているお

寺のいすを照らしました。けれどもカレンのこころはあんまりお日さまの光であふれて、たいらぎとよろこびであふれて、そのためはりさけてしまいました。カレンのたましいは、お日さまの光にのつて、神さまの所へとんでいきました。そしてもうそこではたれもあの赤いくつのことをたずねるものはありませんでした。



赤いくつ DE RODE SKO

赤いくつ DE RODE SKO

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和 30）年 7 月 15 日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005 年 6 月 3 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。